

Wonderful 中山間地農業

佐藤 泰一郎*

はじめて棚田を意識したのは、1989年の5月末であった。不謹慎ではあるが調査ではなく、溪流釣りの帰り道であった。一般的に釣りは、早暁に一番のポイントに入渓するので、里を通るときにはまだ暗闇であることが多い。その日も同様に、沢を釣り上り、尾根を越えて沢を釣り下り、帰途にダムの堰堤を越えたそのときに、対岸の杉林の向こうに棚田が見えた。明らかに遊びの痕跡を残したまま、対岸の棚田の頂部へ立ってみると、「千枚田」、「蓑笠田」と表現されるままの水田斜面であった。折りしも田植え時期で、家族や親戚と思われる多くの人たちがあちらこちらで、ハンドトラクタでの作業を除いて、腰をかがめて人力で作業をしていた。

関東平野北端の火山灰土壌の「金沢高野の吊るし米」と揶揄された貧村も、高度経済成長に伴って都市の波が押し寄せ、農地が虫食い穴のように亡くなっていく時代に育ち、土地生産性と労働生産性を追求する農業環境を整備するための学習をしてきた自分にとって、棚田のインパクトは非常に強かった。残念ながら、それまで得てきた知識を応用できるところが全くないと感じた。

機会を得て、米国、豪州の畑作地帯を訪れたことがある。米国中西部の一辺が1マイル(約1.6km)を超える発芽直後のダイズ畑では、畝の線が遠くでは糸になり、ついに薄緑色の絨毯に変身した。豪州グレー・マーレイ流域の1区画が400haを超える畑作地帯での綿花収穫後の様相は、残雪の砂漠であった。GPSを装備して位置を常に把握可能し、キャビンに空調設備が整い音楽が流れる、クローラー走行の出力600PSを超えるトラクターが30m幅を一気に耕耘したときに舞い上がる土煙は、さながら西部劇映画に出てくる騎兵隊が走っていったかのようにであった。ともに日本とは比べものにならないほどの大規模な農業を目の当たりにして驚いた。まさに、土地生産性と労働生産性の向上を追及する農業を目指していた。そして、このような大きな農地から世界へ食糧を供給するという自負を強く感じた。

一方では、土壌および農地の劣化に関するいくつかの深刻な問題を知った。大型機械の導入による踏圧による土壌圧縮とそれに続く硬化、固結化、土壌圧縮防止のための耕耘の制限や不耕起栽培に伴う雑草繁茂に対する除草剤散布効果の持続性、単作による害虫発生と防除、畑

地からの土壌侵食、過度の地下水汲み上げによる水資源の不足と水質悪化などである。まるで、モグラ叩きゲームのように後から問題が発生する。農家は、これらの問題を深刻に受け止め、今後の将来像について、教育・教養の向上と情報入手の重要性を認識している。

棚田の調査とは、急な斜面を登ったり降りたりして、体力の消耗が激しいものである。特に夏場は、蛇などがいてさらに気が重くなることもしばしばである。農家の方からも、労いのことばなどいただいたりするが、話の中に、1000年も前から水田として利用され続けているという話を聞いた。歴史を調べてみると事実であり、自分の教養不足を痛感した。水田における稲作農業は、持続可能で同じ場所で繰り返し耕作ができる、時間軸の深い、農業である。これは、先人からの知恵を受け継ぎながら創意工夫が続けられてきた結果であることは疑いもないものである。棚田の調査を進めていくと稲作のためには水田整備だけではなく、山林の整備も重要であることに気がつく。水資源を涵養するばかりでなく、土層改良や肥培管理のために大量に必要なカヤなどの草の供給源(カヤ場)になる。

このようにして考えてみると棚田とはうまくできていて、上から下へ(上流から下流へ)必要なもの(エネルギー)をおろすと米が出来上がるというものである。同じことが、畑作物についてもおこなわれている。また、見た目(農地の高低さ)ほど、辛い作業ではないという話を聞いた。むしろ、平地で同じ作業をするとなると人力だけでは難しく、規模拡大に伴いさらに機械力が必要になる。中山間地の農業は、人力に限界があり、規模拡大が望めないのも、生産量の増加は見込めない。しかし、土壌圧縮を誘因するような問題は発生しない。つまり、短期的には大きな利益は得られないが、山林の恵みを利用しながら持続的に耕作が続けられるのが、中山間地農業である。

火山灰土壌ではスコップ一杯の土を容易に掘り起こすことができるが、中山間地の棚田では石礫が多く剣先を10cm押し込むのにも苦労する。ツルハシを抱えて畔を歩きながら、もしかして中山間農業は魅力的かも……。

受稿年月日: 2004年5月15日

受理年月日: 2004年5月15日